いわき市より

田中拓也

福島県いわき市を震災後にはじめて訪れた。私が暮らす茨城県水戸市から同市まで約九十キロ。高速道路を使えば約一時間ということもあり、これまでにも度々訪れている街である。同市はかつて炭鉱で栄えていたが、炭鉱閉山後はスパリゾートハワイアンズなどの娯楽施設を核とした観光地として賑わいを見せていた。

しかし、昨年発生した東日本大震災に伴う福島第一原発事故以来、同市の環境は激変している。地震による直接被害、原発事故に伴う避難者の流入、さらにいわき市から他県に避難する人々の流出、農業・漁業の深刻な打撃…。私が訪れた時も海岸沿いの津波被害の痕は痛々しく残ったままだった。

そのいわき市で『壜』という個人誌を発行しているのが高木佳子である。「潮音」に所属する高木は震災以来、個人誌『壜』のほか、自らのブログをはじめ各媒体において、積極的に短歌と文章を発信している。

①さんぐわつのほそすぎるあめ、をみなごのやはきからだをよごしゆくなり

（『壜』二号・二〇一一年四月）

②わたくしの右のてのひら撫でながら生きてくださいといふ人のゐる

③この街を出てゆくといふ、をさなごをかばんのやうに脇に抱へて

（『壜』三号・二〇一一年十月）

④冷えしるきペリエのやうに言ひたりき瓦礫のなくなるのがさびしいと

⑤熱傷も瘢痕もなくまつしろな曝されがあり白蓼の垂る

（『壜』四号・二〇一二年四月）

⑥空青しフクシマの子と結婚はさせないといふその子の母は

『壜』に掲載されている作品を抄出してみた。震災直後の壮絶な状況の中で詠まれた①②の作品。震災のおおよそ半年後、避難してゆく親子を冷静に描写した③の作品と「瓦礫のなくなるのがさみしい」という一語をそのまま切り取った④の作品。そして、現在の自らが置かれた状況を正面から詠んだ⑤⑥の作品。いずれも、胸を打つ、重い作品である。高木は声高に自らの状況や原発への思いをうたうことをしない。ただ、いわき市に暮らす一人の歌人として短歌を発表し続けている。

『壜』四号の高木の論考「『当事者』と『非当事者』のゆくえ」も力のこもった文章であった。その中の一節を紹介したい。

当事者・非当事者という、従来の二元的な捉え方を脱けることは新しい短歌の地平を拓くことにつながらないだろうか。ことばはゆたかでなければならない。当事者だからいい、当事者ではないから詠えない、ということでは今までのままである。感じたままに、考えたままに、矮小なあらゆるレジームを打ち破って、誰もが当事者として真摯に「今」という時の表現を試みるべきだと思っている。そして、もっと言えば、あらゆる人が今、この震災に何らかのコミットを持ち、その個人の姿勢や意見を表明しなければならないような一律の雰囲気になっていること自体が、私には異様に思われる。

さまざまな作品と言説があふれる中で高木の誠実な姿勢に私は共感する。今後の高木の作品と論考も注視したい。